

長野県須坂市における果樹栽培の変容

三浦弘子

1. 研究の目的

長野県須坂市は工業都市であるとともに、先進的な果樹地帯であり、りんご・巨峰ぶどうの一大産地である。大正時代まで養蚕・製糸業の町であった須坂が、果樹地帯を形成するまでの過程と近年の変容の原因を明らかにし、今後の動向を考察することが目的である。

2. 論文構成

第一章で須坂市の自然・人文環境について概説し、第二章で須坂市の基幹品種に限定してその栽培の概要を述べたが、栽培技術や方法については省略し、まず農家の品種選定や転作動機につながる労働力や所得について述べ、さらに長野県の果樹の生産と市場地位、価格の推移について記述した。第三章では須坂市の果樹農業の実態と変遷過程を論じ、りんご単一栽培から多品目栽培へ移行した原因を、短期間に全国有数の産地を形成するに至った巨峰ぶどうの導入の経緯をとり上げて検討し、また各地区の農業、とくに果樹栽培の推移と現状を比較し、果樹栽培に関する地域区分を行なった。第三章までで果樹地帯形成の過程と原因を考察してきたが、実態をより明らかにし、今後の変化を探るため、須坂市北部において土地利用調査と過去の転作状況、原因および今後の転作計画の聴き取り調査を行い、自然条件との関連なども含め第四章にまとめた。

3. 調査結果とまとめ

調査地域は松川扇状地の扇央から扇端、さらに千曲川沖積地にかけて設定したが、土地利用は高度差による東西の地域差が顕著であった。栽培品

目や規模、その導入、拡大過程にも地域差がみられ、調査地域は東部、中央部、西部に三分される。

果樹の導入が早く、多品目果樹地帯である東部は、傾斜がやや急で起伏も他に比べて大きいため各果樹園の規模は小さくなっている。中央部はりんご中心に巨峰ぶどうを加えた大規模果樹地帯であり、りんご新品種への更新も早くから進められた。西部はりんごの卓越する旧水田地帯であるが、土壌分布によって早くからりんごが導入された区域と、ここ2～3年にわい性りんごが増加している区域に分かれている。

過去の転作原因を調べると、前作物の不振・低迷といったマイナス要因による転作に加え、より有利な作物を模索し、導入・拡大する積極的な転作も多く、地域差は自然条件の差のみならず、社会情勢や市場の動向への各農家の対応の差によって生み出されているといえる。つまり意欲的な農家による“虫くい”転作に、自然条件の差が加わって、転作の速度・範囲・規模の差ができており、さらに水田に囲まれて水はけの悪いりんご園や荒地同然となった果樹園が生み出され、問題となりつつある。このような問題点を解決するためには、地域レベルの転作計画や協力が必要であろう。

しかし今後の転作計画をみると、あるいはまた農家単位の虫くい転作による巨峰ぶどう産地の早期形成とを考え合わせると、おそらく今後も、新品種の導入・定着は各農家で進められ、対応・変容は早いですが、地域差のある果樹地帯となってゆくと思われる。